

No.13 海外で育つ日本ルーツの子どもたちの学び

ー補習授業校OBOGインタビューを通してー（調査報告）

岡村郁子（東京都立大学）、大橋由貴（ダラス補習授業校）、藻谷ようこ（ポートオブサクラメント補習授業校）

研究の背景

- ◆ 在外教育施設の一つである補習授業校は、平日に現地校やインターナショナルスクールなどに通学している子どもに対して、主に土曜日を利用して国語、算数など一部の教科について授業を行うもの。2024年現在、**世界51カ国・1地域に242校**が展開。
- ◆ 設立当初は将来日本に帰国してから授業についていけるように日本語での「補習」を行うものであったが、近年では日本に帰国する予定のない家庭や、国際結婚家庭の子どもも増加し、**在籍児童生徒の日本語力や在籍目的も多様化**している。

【2000年代以降に相次ぐ、グローバル人材育成に関する政策】

とりわけ近年は、**在外教育施設に着目した施策**が多々出されている。

- ◆ 2022年「**在外教育施設における教育の振興に関する法律**」、
- ◆ 2023年、上記の基本方針として、在留邦人の子の学びの保障、国内同等の学びの環境整備等を制定。
- ◆ 「**せかい×まなびのプラン**」（文部科学省,2023）では、「**在留邦人の子＝将来の日本を支えるグローバル人材の原石**」と明記。

調査の手続きと方法

①**調査時期**:2024年8月～2024年12月

②**調査対象**:過去に補習授業校に在籍したことのあるOBOG(卒業の有無は問わない)のうち、2023年12月～2014年2月に実施したアンケート調査(回答354通)において「インタビューへの協力可能」と回答した約104名のうち、これまでに実施に至った37名。**うち29名**を分析対象とした。

③**調査方法**:ZOOMを用いたオンラインによる約1時間の半構造化インタビュー。インタビューアーはAG+OBOG部会委員8名(うち3名が本発表の報告者)

④**インタビュー内容**:

【**属性項目**】年齢、性別、出生地、補習授業校在籍時の滞在国・地域、現在の滞在国・地域・日本での居住経験・年数、海外での居住経験・場所・年数、第一言語(日本語・外国語)・第二言語(日本語・外国語)・家庭での言語使用状況、家庭外での言語使用状況、最終学歴・現在の在籍校／職・アルバイトなど、補習授業校に通い始めた学年・在籍年数。

【**補習授業校での経験について**】・補習授業校に通っていた／やめた理由、得意だった／苦労した科目・印象に残ったイベント、楽しかった／つらかったこと、その経験が現在の仕事や生活に与える影響など。

【**補習校についての考え**】・補習授業校の存在意義、補習校をよりよい学校にするための考え、OBOGとして補習授業校や後輩・保護者に対して考えられるサポートなど。

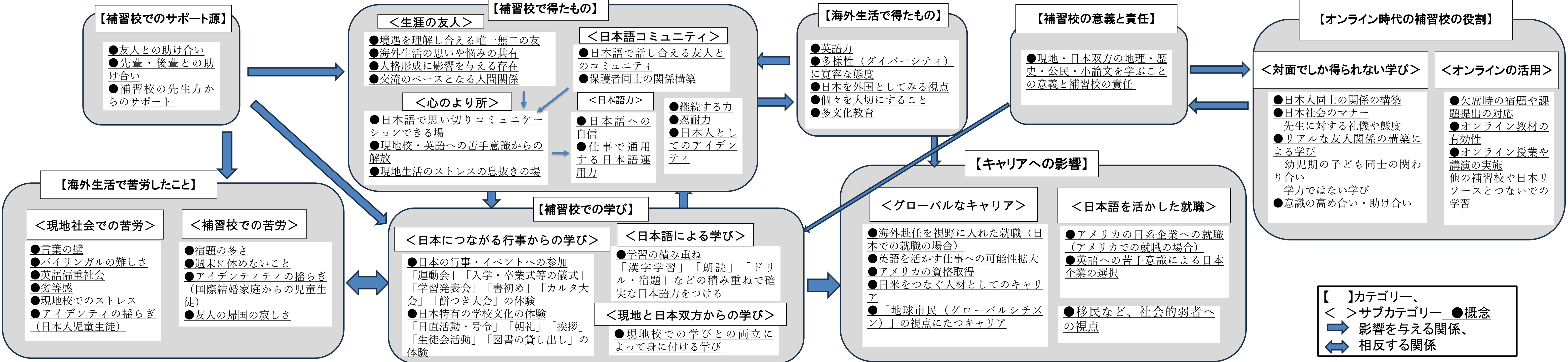
【**キャリアとの関連**】・職業選択における補習授業校での経験の影響、なぜ日本／海外で就職したのかなど。

⑤**分析方法**:音声データを文字起こしし、質的分析支援ソフトMAXQDAを用いてコーディングを行い、MGTAにより概念とカテゴリーを抽出した。

【謝辞】

本調査は海外子女教育振興財団が文部科学省より受託した「**在外教育施設重点支援プラン(通称AG+)**」によるものです。インタビューを担当くださった補習校チームOBOG部会委員の亥本房子先生、ウンターベルガー玲子先生、後藤豊実先生、ダン桑津先生、浜田佐知先生、実施にお力添え賜った海外子女教育振興財団の佐々信行先生、芝田進先生、AG+委員長の佐藤郡衛先生はじめAG+ご関係各位、調査にご協力いただいたOBOGの皆様深く御礼申し上げます。

調査結果 ～結果図および語りの実際～



	大橋会員インタビューにおけるバリエーションの例（一部抜粋）	藻谷会員インタビューにおけるバリエーションの例（一部抜粋）
補習校での学び	<ul style="list-style-type: none">アメリカの学校にはない日本の学校生活や日本文化を学ぶことができてよかった。「運動会、入学・卒業式」、号令や直直など。アメリカの学校では中学以降は学級の活動がなくなるが、補習校では学級活動があり、学級単位で行っていた学習発表会はクラスで力を合わせて作り上げたことが思い出に残っている。幼稚園から高校までが発表するので、高校生の発表が素晴らしい。日本の本をふんだんに借りることができる図書館はとてもよかった。・補習校での活動の中で、日本語を維持でき、漢字がしっかり学べたこと。保護者が行った講演会、学習発表会、古本市。・生徒会活動、SDGs活動もとても役に立った。コロナ禍だったこともあり、先生方とメールでやり取りすることが多く、大人とのメールのやり取りが勉強になった。	<ul style="list-style-type: none">運動会、学習発表会、秋祭り(餅つき)など、現地にはない、日本的な行事への参加。朝礼（整列して話を聞く）など、日本の学校文化。朝礼で、ある先生が教訓のある話をいつもしていたことが印象に残っている。
補習校で得たもの	<ul style="list-style-type: none">補習校の仲間とはつながりがあり、一生ものの友達と感じている。補習校に通っていた「連れてこられてしまったものたち」の共感ができる特別な存在。補習校の友達とは境遇を理解あえて、心のよりどころになる友達になった。今でもつながりがある。補習校にいた人たちが最も心のよりどころとして近いと感じられる。今でもインスタなどで補習校時代の友達とつながっているし、DM等で会話する友達もいる。・帰国子女同士でないと分かり合えないことがあり自分の人格形成を助けたのは補習校だと思っている。補習校の友達とは今でも連絡をとりあっている。久々に会ってもすぐに話ができる補習校の友人関係だと思ふ。・日本の友達と会えたこと、今でもつながっている友達もいる。補習校時代の友達と助け合ったり、先輩に助けてもらったり、自分が苦労した分、後輩を助けることができたことは大きかった。現地校でうまくいかなかったことを友達に聞いてもらったりして、補習校には息抜きのような感じで通っていた。何よりも友達と会えること。またその絆。「補習校に通っていた」という話題で盛り上がるができる。アメリカに住む日本人と友達になったこと。補習校では日本語で話せることが良かった。英語にはずっと苦手意識があり、現地校ではすごくおとなしい子供で、まるで性格が分離しているようだった。家族以外と日本語でコミュニケーションができるのはよかった。補習校時代の友達が日本全国にいた感じがし、アメリカにいながら日本各地に友達ができた。補習校を続けたことで、自分では当時は気づかなかったが流暢な日本語が話せる力が自然とついていった。途中でやめていたら日本語ができなくなっていたと思う。	<ul style="list-style-type: none">当初は駐在員家庭としてアメリカにいたので、日本にルーツのある友達ができると、日本人サイドのコミュニティがあると感じる事ができて嬉しかった。仕事で日本に行くこともあるが、(自分に日本の)「交流のベース」があるというのは役に立っている。家族同士の絆も強く、今でも親同士の交流がある。・仕事でも使用できる日本語力。そのような日本にルーツを持つ家庭同士の強いつながりは、補習校以外ではなかなか得られない。英語を新しく学ばなければならなかった(幼少期にアメリカにいたことはあっても)ので、補習校は「ポジティブ」な場だった。「日本の音楽を聴いたり歌ったりするだけではなく、それらの歌詞を理解して、どういう意味が込められた歌なのか、どういう気持ちで作詞作曲されたのかなど、考えることができます。日本語を話せるのならそれくらいは当たり前のことだとは思いますが、その当たり前こそが素晴らしい」と私は考えています。これは本やゲームにも言えることで、ただ楽しむだけではなく、どういった考えがその作品を完成まで至らせたのか、作者はどのような感情でどのようなメッセージを残したかったのか、など、頭の中に様々な思考が生まれてくるのです。ただ娯楽を楽しむだけではなく、それらについて深く考えることができる。それが、とても嬉しいのです。もちろん、これらは現地校で英語を通して学んだことの積み重ねの影響もあると思います。ですが、英語でできることが当然の様に日本語でもできるというのは、私の誇りでもあります。」
補習校での苦労	<ul style="list-style-type: none">仲良くなった友達が次々と日本へ帰国してしまうことで、今を全力で楽しむことを学んだいやいやでやたらなかった補習校だったが、あの空気の中に入れたからこそ今でも自分が日本語を話すことができる。家では日本語だったの、現地校では英語が不得意に感じ、学年が上がるのと補習校の国語についていけなくなり日本語が不得意に感じるようになり、いつも劣等感を感じていた。どんどん友達が辞めて行ってしまうのが寂しかった。現地校がづらかったので、補習校があるから現地校が乗り越えられた。日本語補習校のはずなのに、英語がどのくらいできるかの壁があるように感じた。	<ul style="list-style-type: none">宿題が面倒だったが「補習校へは遊びに来ている感覚」だったのでしょくないと思ってやった。自分自身のことではないが、アメリカに生まれて、日本にもルーツがあって、自分はいたい何人なのかということ悩んでいる人がいることも補習校で間接的に知ることになり、アイデンティティについて考えるきっかけになった。人によっては日本人というアイデンティティと折り合いをつけるのが大変なこともある、ということが分かった。
キャリアへの影響	<ul style="list-style-type: none">アメリカでの暮らしの中でダイバーシティ・個々を大切にすることを教育を受けそれが現在の自分に影響を与えている。就活でもその点がしっくりきた会社を選んだように思える。帰国したのが高1だったので、アメリカに就職することは考えていなかったが、仕事からみてCPAをとり、海外赴任の可能性も視野。英語にはずっと苦手意識があり、英語にはかかわりのない職場を選んだ。アメリカにいたことで、Made in Japanがすごいと感じられたので就活の時には、日本で就職しようと思っていた。就活をした時、日系企業に採用されるアピールポイントになったと思う。アメリカの企業に勤めている現在は日本語を使う機会はないが、日本関係の仕事がありそうときは手を挙げています。英語が得意なことで英語のスキルが生かせる仕事をしてきた。今の仕事では日本人が英語を日本語で学ぶ状況から英語で英語を学ぶスタイルを開発することを考案中で、自分が小さいころ日本語が苦手だったころに補習校で日本語は日本語で学んだように、その逆を生かせないかと思っている。多文化教育に興味を持ったことは、日本国外で育てばバイリンガルになるというほど簡単なものではないと実感したからともいえる。	<ul style="list-style-type: none">「グローバルな視点、気づき」 補習校というより、現地のESLのクラスのことだが、自分は駐在の父親についてきて仕事などは保障されているが、英語を学ぶクラスメイトの移民には本当にいろいろな立場の人がいると、社会的弱者といえる人々がいる、ということに気づく経験をし、国連の仕事に興味を持つようになった(日本で就職、会社員の経験を経て大学院で開発経済を専攻し、その後国連で勤務)。「日本をつなぐ人材の育成」という学校のモットーに触発され、そのような仕事をしたいと思うようになった。